

令和5年度 学校評価表

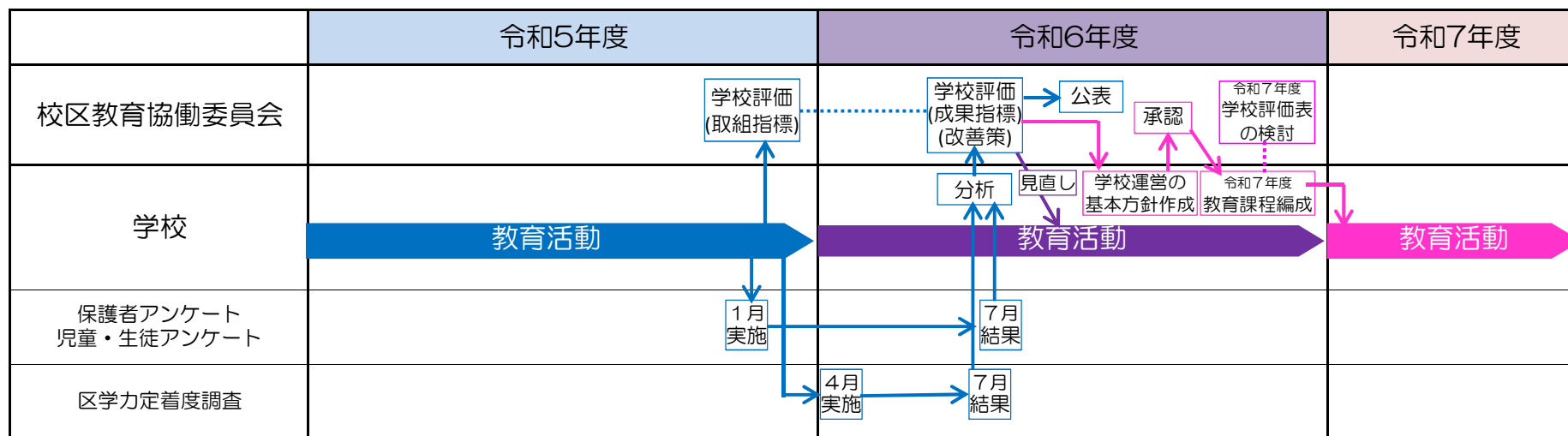
品川区立台場小学校 校長 中嶋 英雄
 台場小学校校区教育協働委員会 委員長 酒井 朗

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和5年度の学校評価が令和6年度および令和7年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和5年度 学校評価 品川区立台場小学校

評価項目1 学力に関すること

重点目標		○各教科の学習内容で、基礎基本となる知識や技能の定着を図る。 ○自ら学ぼうとする意欲・学習態度を大切にして、主体的で対話的な深い学びの実現を図る。 ○教師の指導力の向上を図る。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	区学力定着度調査では、全学年各教科の目標値を90%以上、上回るようにする	目標値の90%を達成した教科は、全体の94%だった。(そのうち目標値を上回った教科は、全体の47%であった。)	A	○個別の支援、個人差に対応する指導の仕方を工夫し、個別最適化を推進する。 →タブレット端末を使ったドリル学習や自主学習の取り組み方を工夫し、学力が低い児童だけでなく、中間層の児童、学力が高い児童に関してもさらに力が伸ばせるようにする。 発達障害支援員、ICT支援員をさらに活用する。朝学習の計画に基づいて着実に実施することにより、学習の定着を図る。
	少人数・複数指導体制、丁寧な見取りと適正な評価によるきめ細かな指導を進める	複数指導体制では、つまずきが予想される児童に適切な指導・支援ができた。少人数指導においても個別に対応しているが、支援が必要な児童が多く、学力のみでグループ編成できない状況もあり、きめ細かな指導が行き届いているとは言いきれない。	B	
	個の課題に応じたドリル的学習(東京ベシックドリル、区学テ補助教材、eライブラリ、MARUGLANDなど)を適宜活用する	家庭との連携をめざし、区学力定着度調査後、個別の補助教材について個人面談で保護者に伝えた。児童が自分のペースでeライブラリやMARUGLAND等を進めることができたが、個人差がある。その他の教材の活用はできなかった。	A	
	サントレ・視写・暗誦・作文・スピーチなどに朝の帯学習で取り組み、言葉の力を高める	1・2学年におけるサントレの取組を通して、未学習の漢字が読めたり、少し難しい言い回しができたりと、語彙が広がった。作文や暗誦の取組が不十分である。	B	
②	各学年、「好きな教科や授業がある」と回答する児童をクラスの90%以上とする	90%を超えたクラスは、6クラス、全体の60%となった。肯定率に学年・学級による差が見られた。(肯定率は平均93%であった。)	B	○台場スタンダードを徹底する。 →年度初めに各学級で確認したり、学期に1回程度教員研修を行ったりして、共通理解を図る。 ○児童が主体的に学べる授業づくり、教材開発を行う。 →児童が互いに話し合ったり、学び合えたりできるような授業づくりをする。教員が見通しをもった教育活動を展開し、SSSを活用しながら教材準備を行っていく。 教員同士が学び合える環境づくりをする。
	「学習の準備」「姿勢」「聞き方や発表の仕方」など、台場スタンダードを徹底する	台場スタンダードをもとに徹底を図ったが、学習準備、姿勢、聞き方等、達成度に個人差がある。また、学級によって徹底に差が見られる。	B	
	どの児童にも分かる授業を目指し、明確な指示や発問、板書などの工夫を進める	授業のユニバーサル化を意識し、指示・発問・板書を工夫している。	A	
	情報収集、整理分析、まとめ、表現、考えの共有・比較、合意形成などの力を育てる	ロイロノートを活用し、考えの共有・比較を行ったが、合意形成まで実現できていない。また、全教科および様々な場面でシンキングツールを活用できなかった。	B	

③	教材研究、研修の充実や通級指導教室などの連携を図る	通級指導学級と児童の情報共有ができたが、教材や学習内容の共有は十分ではなかった。研修で学んだことを学級での指導に生かした。教材研究の共有はまだ十分とは言えなかった。	B	<p>○ICT教材の共有を図る。教材の共有などを通して、教材研究のさらなる充実を図る。 →ICT教材の活用を学年ごとに確認したり、効果的だった教材を共有したりする。研究授業や研修の内容をフォルダなどに入れて校内で情報共有ができるようになってきたので、今後は校外で得た有意義な情報も校内で共有し生かす。 通級での教材や実践を共有する。 ○ベテラン教員がモデルとなる授業を公開し、より多くの教員が参観できるようにしていく。</p>
	ベテラン教員が教材分析、タブレットの活用の共有やOJT研修を推進する	教材分析やタブレット活用について、教員間で話題とはなっているが、全体での共有は不十分であった。ベテラン教員による授業公開や授業観察および教材指導・研修が十分とはいえない。	B	
	アセスメントおよび読み書き障害などに対応したドリルやソフト(東京ベーシックドリル、区学テ補助教材、eライブラリ、MARUGLAND)を有効に活用する (特別支援教室・通級指導教員は、MIMトレーニングなどの使用が可能)	eライブラリやMARUGLAND効果的な使用場面を考え、児童に自分のペースで学習を進めさせることができた。特別支援教室・通級指導学級では、MIMトレーニングを活用した。難言教室は年間を通して読み書き障害の指導について専門家による研究を行い、指導に生かした。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

令和5年度 学校評価 品川区立台場小学校

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		○家庭、地域、保育園・幼稚園、連携学校などと連携し、規範意識の醸成と基本的な生活習慣の定着を図る ○各教科や市民科、学校行事、保幼小交流活動、日常生活の中で、人権尊重教育を通して、自他共に大切にし、相互に認め合える態度や能力を育て、支持的風土を構築する ○豊かな国際感覚を身に付けて、共生共助社会の実現を目指そうとする態度や能力を育てる		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	学習規律・生活規律を守ることを、全児童の90%が意識して、主体的に学校生活を送る時間を守る、あいさつや返事、丁寧な言葉遣い、家庭学習・読書などの定着を図る	肯定率は平均94%であった。90%超えたクラスは8クラス、全体の80%となった。学年による差が見られた。時間を守る、家庭学習・読書の習慣は身に付いてきている。進んであいさつする、返事、丁寧な言葉遣いについては教員自ら手本を示しているが、未だ定着していない。	A	○進んで挨拶できる児童が少ない。 →教員が自ら挨拶する姿を継続して見せていく。また、委員会活動などで取り組み、児童が主体的に実践できるようにする。高学年が下の学年の手本になれるよう指導していく。
			B	
②	人権に係る知識や態度を身に付け、自己を大切にするとともに、友達などに優しく接する	友達を大切にすることや人権について学ぶ態度が身に付いてきている。	A	○人権教育を計画的に進めている。より深まるように継続した取組を充実させていく。 →人権課題を絞って指導する。具体的な場面で実践できるように指導していく。
	人権教育指導計画に基づいて、普遍的、個別的な視点からの取組を充実させる	4～6学年では、個別的な視点からの取組の学習を実施した。特にゲストティーチャーを招くなど、学習内容が充実した。	A	
	命に係る取組を年間指導計画に位置付け、命の尊さを考え、命を守る態度を育てる	6学年で緩和ケアの学習を実施した。いじめ防止の学習を各学級で計画的に実施している。	B	
	縦割り班活動・清掃における交流を通して、自己有用感を高める	ペア学年での縦割り活動、人権学習会等を通して、児童の心の成長が見られ、特に高学年において、自己有用感が高まってきている児童が多い。	A	
	日本や世界にも目を向け、多様性を尊重し、課題を解決しようとする姿勢を育てる	多様性を意識したり、日本の伝統文化について学習したりする機会が多く得られた。6年生の提案発表会でも課題を解決する姿勢が発揮された。	A	○児童に身近な地域のよさに気付かせる。また、世界に目を向ける機会を増やす。 →地域を調べる学習や熟議を充実させる。市民科の一貫プランとして位置付ける。食育やオリンピック、パラリンピックなどに関する

③	地域や日本の伝統文化に触れ、その良さを発信する能力や態度を育てる	剣道教室、茶道教室、箏教室、江戸切子体験、品川蕪栽培、歌舞伎体験などを通して、日本の伝統文化に触れることができた。商店街見学を通して、地域のお店の努力や地域の人とのつながりができた。東海道まち歩き&目黒川ツアーを通して町の良さを再発見することができた。図工の題材の中で、日本の芸術作品等を取り上げた。地域や伝統文化に親しむことはできているが、良さを発信する能力や態度を育てるまでにはいたっていない。	B	学習を通して世界に目を向けさせ、多様性を受け入れる態度を育てる。
	「住み続けられるまちづくり」や「海の豊かさを守ろう」に取り組み、安全で、安心して、大切なものが守られる社会を自らつくり出していこうとする意識や能力を身に付けさせる	社会科、市民科等の学習や体験活動を通して、児童一人一人が自分なりの考えをもつことができた。地域の伝統文化体験を通して、児童は地域の良さを理解した。5学年の東海道町歩き&目黒川ツアーを通して、SDGsについて学習し意識させることができたが、能力を身に付けさせるところまでは及ばなかった。代表委員や環境委員が中心となって取り組んでいる。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

令和5年度 学校評価 品川区立台場小学校

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		○体育、健康教育全体計画に沿って、体育科における授業の充実を図る ○運動の習慣化や健康意識の向上を図る ○安全指導計画に沿って、交通事故や災害、不審者対応などの様々な危機を想定しての安全指導や体験的な訓練を行い、命を自ら守ろうとする態度や知識、技能を身に付けさせる ○個に応じたアレルギー対応を適切に行い、未然防止に努める		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	全ての児童が、「わかった」「できた」喜びを味わい、運動の意欲が高まる	全体として運動の意欲は高まったが、個人差が見られた。	B	○個人の能力や習熟度に応じた指導が行き届かず、必要な技能が身に付けられないことで、運動への意欲が低下している児童が見られる。 → 習熟度に応じた場の設定、TAへの具体的な指示、一人一台端末を活用したフィードバックを行うことによって、個に応じた指導の充実を図る。
	常に自分なりのめあてを意識して取り組めるよう、場の工夫やTAの有効な活用を図る	毎時間めあての設定と振り返りや、場の工夫を行った。体育部教員からのカードを活用した。TAの活用が十分にできていない。	B	
	オリンピックやパラリンピアンを招いた体験学習や講演会を全学年において実施する	全学年で計画的に実施した。様々な体験や経験を通して、興味や意欲につながり、自信をつけさせることができた。	A	
②	東京都統一体力テストで、5割以上の種目が区の平均以上である	区の平均以上は、29%であった。(昨年度は20%であった。)	B	○体力の低下がみられる。 → 体力テストの結果を活用し、苦手な運動種目について取り組むようにする。 体力向上月間やチャレンジジャンプ、スポーツライアルなどに積極的に取り組み、意欲を高め、体力向上に努める。
	一校一取組、体力向上月間、スポーツライアル、ワンミニッツで、自己・学級目標を設定し、達成感を味わえるようにする	取組期間中は自己・学級目標を設定し、意欲的に取り組む姿が見られた。教員は意識して児童に声を掛け、体力向上に努めた。	B	
	養護教諭、栄養教諭、医師などと連携を図り、保健学習、食育などの充実を図る	養護教諭による保健学習や栄養教諭による給食指導、栄養の学習、全学年による歯みがき指導を通して、児童の意識が向上した。	A	
③	学校や日常生活で、安心して安全に生活することができる	安全点検や安全指導、避難訓練などが計画的に実施できている。	B	○家庭との連携を図る。 → 保護者会や学年だよりなどで学校のルールを伝える。放課後の過ごし方やヘルメットの着用、公園でのルール、交通安全など、児童への指導と共に、家庭にも知らせる。
	警察署や外部機関と連携し、安全点検、安全教室・避難訓練などの実施、学校や家庭ルールの徹底を図る	外部機関と連携しながら計画的・効果的に安全指導を実施した。チェックカード等、家庭での取組を呼び掛けたが、ルールの徹底を図るまでにはいたらない。	B	
	アレルギー研修やチェック体制や危機対応の確立を確実に進める	アレルギー研修を実施し、マニュアルを確認した。栄養士や養護教諭と連携し、給食時のチェック体制や、救急搬送体制などについて共通理解を深めた。毎朝、職員室前方の「食物アレルギー確認ボード」をチェックし、全教職員で該当児童を把握した。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

令和5年度 学校評価 品川区立台場小学校

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		○「いじめ」という人権侵害の防止を徹底し、差異を認め合える人権教育を推進する ○いじめの早期発見や対応、組織的な解決に努める ○保護者、家庭と連携を密にするとともに、地域、教育委員会や関係諸機関とも協同して解決に当たる		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	本校のテーマ「自分も大事 友達も大事 認め合い」が100%の児童に浸透している 「人権DAY」(月1回)では、人権感覚を育てる指導や活動を行う	「自分も大事 友達も大事 認め合い」のテーマが児童に浸透している。 毎月の人権DAYの前に、指導内容が周知され、計画に基づき効果的に指導・活動を行った。一方、学級によりばらつきが見られた。	B B	○テーマは児童によく周知されている。具体的な取組内容を工夫する。 →「人権DAY」や「人権レンジャー」の周知や指導を徹底させる。具体的な場面や例を示して指導する。また、今後も継続的に指導していく。
	生活アンケートで「学校が楽しい」かつ「友達と仲良くしている」と答える児童が90%以上いる アンケートなどの結果に基づき、面談や聞き取りなどにより早期発見に努める	肯定率の平均は学校に関することが79.2%、友達に関することは80.8%であった。低学年の肯定率が低かった。 日頃の様子だけでなく、アンケートをとったその日に聞き取りを行って児童の気持ちに寄り添い、児童の状況を把握し、児童理解・いじめの早期発見・未然防止に努めている。各学級担任と生活指導主任が連携し、迅速に対応している。	B A	
②	状況把握、児童理解に努め、全教職員、保護者と協力し、問題解決に当たる	生活指導夕会で全教職員による情報共有を通して、組織的に問題解決に当たった。学年主任、生活指導主任、養護教諭、管理職に報告・相談し、主幹教諭、特別支援教育コーディネーター、SC等と連携を密にとり、チームで対応した。ケース会議を活用しながら、状況や児童の実態把握について共通認識を図った。いじめ対策委員会を中心に全校で対応できている。必要に応じて管理職同席のもと面談も行った。	A A	
③	いじめの未然防止、早期発見に努め、いじめゼロを目指し、適切に組織的に対応する	アンケート調査やそれに伴う聞き取りがいじめの早期発見につながっている。また、学校全体としていじめに対応しているという組織的な体制ができている。	A	○いじめの未然防止、早期発見に努めていく。 →教員間で情報共有の場が設けられているので、今後も続けていく。 校内委員会もしっかり機能しているので継続して取り組んでいく。
	学年会(週1回)や校内支援委員会(月1回以上)を実施し、些細なことでも見逃さない	週1回副担任も含めた学年会を行い、情報を共有し、互いに助言し合い、記録に残すことによって経過も共有できるようにしている。	A	

温かな学級風土、児童・保護者との信頼関係づくりに努める

年2回の個人面談を実施し、保護者との信頼関係づくりに努めている。児童の自主性や創意工夫を生かしながら、一人一人が安心して過ごせる温かい雰囲気学級のづくりに努めた。伝える内容も精選し、保護者と密に連絡を取り、協力・連携して児童の育成を図った。計画的に、また必要に応じて校内支援委員会を開催している。

A

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 地域や近隣幼稚園・保育園との連携に関すること

重点目標		○台場幼稚園・保育園と連携して作成する「幼保小架け橋プログラム(スタートカリキュラム)」をとおして、幼児期に育まれた力を最大限に発揮し、目標達成を諦めない力や自制心を育み、主体的・対話的な深い学びの実現を目指す。 ○地域の伝統文化に積極的に参加することで、郷土や日本の伝統文化に誇りをもたせる。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	保幼小一体教育の実現に向け、就学前における地域の子どもたちを児童・教職員との交流を通して育成する	架け橋プログラムや保幼小の交流(4・4交流 5・5交流)を計画的に行った。教職員同士の交流もできた。	A	○保幼小の交流を計画的に行い、児童と園児だけでなく、園児と教職員、教職員同士の関わりが深まった。 →実践している内容を校内研修等を通して、今後も深めていく。
	のびっこ園台場(台場幼稚園・台場保育園)・八ツ山保育園の園児と、10回の5・5交流、4回の4・4交流、3回の3・3交流を通して思いやりの心情を育てる	5・5交流は13回実施し、のびっこ園台場運動会のボランティアとして40%の児童が参加した。異年齢交流を通して、下級生に教える姿勢、上級生への憧れの思いが育っている。	A	
	校内研究に台場幼稚園および台場保育園の教職員が参加し、円滑な接続に向け、相互理解を図る	校内研究を通して、幼保の園児の実態や保育の難しさ、架け橋プログラムの必要性を学ぶことができた。幼稚園や保育園の様子について本校の教員が見に行く機会が少ない。	B	
②	地域行事に関心を持ち、参加することを通して、地域を理解し、連携を深める	ふるさとかるたや祭礼、品川かぶの品評会、ドリームジョブなどの学習を通して、地域行事に関心をもつ児童が増えた。	A	○地域行事に参加する児童をさらに増やす。教職員も学ぶ機会と捉え、積極的に交流する。 →地域行事の日程を確認したり、魅力を伝えたりして、児童がより意欲的に参加できるようにする。
	品川第一地区まつり(4-6年)、品川蕪品評会(2年)、ふる里かるた大会(1-6年)に児童が参加する	担任の声掛けもあり、児童は地域行事に積極的に参加し、地域や伝統行事に関心をもち親しんでいる。	A	
	品川・荏原神社祭礼、しながわ宿場まつり、東海道駅伝等に教員が参加する	家庭等の事情で参加できない教員もいるが、主に担当学年を中心に、児童の巡回も兼ね、参加することを通して、保護者や地域の方々との交流を深めることができた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成